

Title	学生の声
Author(s)	
Citation	Cue : 京都大学電気関係教室技術情報誌 (2006), 16: 70-70
Issue Date	2006-10
URL	http://dx.doi.org/10.14989/57895
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

学生の声

「博士課程進学へのきっかけ」

情報学研究科 通信情報システム専攻 佐藤研究室 博士課程2回生 木 寺 正 平

私は現在、佐藤亨教授の下でUWB（超広帯域）パルスレーダのための画像化技術の研究に従事しております。これは室内ロボット等の環境計測において、測距性能に優れるレーダが光学的な画像化処理では実現不可能な高解像度目標形状推定を達成するための研究であります。私は学部4回生よりこのテーマに取り組ませて頂いておりますが、非常に面白いテーマであったため博士課程においても同テーマに関して更に研究を深めていきたいという思いが強くなりました。しかし進学を決定するに至るまでには、経済的な理由等で色々と思ひ悩み、なかなか決心することが出来ずにおりました。そんな中で進学を決める一つのきっかけとなったのが、ゴッホの「ひまわり」という絵でありました。修士2回生の初春に東京の美術館でその絵を初めて生で見たときに、美しいというより巨大な創造力を肌に感じました。キャンバスに分厚く塗られた絵の具に作者の芸術に対する執念と情熱を感じ、人間の創造に対する大きなエネルギーを感じました。私の個人的な意見として、芸術と自然科学研究ではその創造過程において、巨大な精神的・肉体的エネルギーが必要であるという点で類似していると思います。博士課程に進学する理由は人それぞれであると思いますが、私の場合は研究を通して自分自身を探求したいという気持ちと、また自分自身が可能な限りの創造力と努力によって、現在の研究で何かの成果を残したいという気持ちがありました。そしてこの時出会った絵は、そのことを再確認させ、私の背中を押してくれたと思います。

実際の博士課程での研究は、先生や先輩方の厳しい意見と向き合い、それを克服し、研究を進めるのに必死に努力をしている状況であります。現在は論文作成、国際会議発表、実験準備などの様々な仕事に追われている毎日です。忙しい日々がこれからも続くと思いますが、最初の志を忘れることなく、自分の創造性と努力を結実させた博士論文を完成させるために日々、研鑽を積んでいきたいと思っています。

「博士課程進学への決断」

エネルギー科学研究科 エネルギー社会・環境科学専攻 エネルギー情報学分野 博士課程1回生 藤 野 秀 則

2004年3月に修士課程を修了し、同じ研究室の友人たちとともに就職しました。会社での職場は新たなシステムを企画・設計・開発している部署で、主に新しいビジネスシステムを支えるソフトウェアのプログラミングを担当していました。最近では少々早いながらも、かねてより交際していた現在の妻と結婚し、子供も授かるなど、至極、普通のサラリーマン生活を送っていたと思います。

しかし、私は会社生活に違和感を持ち続けていました。そもそも、修士一回生から二回生の初めにかけて、人並みに就職活動に取り組んでいたときから、心の奥底では「博士号を取って研究者になりたい」という思いがゆらゆらと揺れていたのです。しかし、当時の私はその気持ちを見ないようにしていました。なぜか？私の未熟さでしかないのですが、周囲の友人が就職活動をしていく中で「自分もしないといけない」と根柢なく思ってしまったためです。そのような未熟な心理状態であったのですが、当研究室の先輩がその会社で活躍していたことや、自分自身に自己暗示をかけていたこともあって就職の内定をいただくことができました。しかし、実際に仕事をしていく中で自分自身の本当の気持ちと、サラリーマンをしている自分自身の状況との乖離が大きくなり耐えられなくなってきたのです。

「やはり、修士までに取り組んでいたヒューマンインタフェースという学問領域を深耕していきたい！自分の気持ちに逆らい、今のままサラリーマンを続ければ、人生を終える時に後悔してしまう。」そう強く思った私は、妻子や両親を説得し、大学に戻る決意をしました。

今は、修士まで在籍していた吉川（榮）研究室（現、エネルギー情報学分野）に戻り、修士までの研究を発展させる形で研究を進めています。ヒューマンインタフェースという領域は文理を問わずさまざまな基礎領域を広い視野で見つめなければならない領域で、研究を進める上でまだまだ自分の視野の狭さを痛感する毎日ですが、自分の決意が間違いだったという結果にならないためにも、また、私を支えてくれている妻子のためにも、一角の研究者として身を立てられるように頑張っていきたいと思っています。